

<目的> 前報に続いて、皮膚の湿潤感受性及びその要因を明らかにするため、液相水分による局所湿潤刺激実験を行い、合わせて触点密度について検討を加えた。

<方法> 実験1, 局所湿潤実験: 成人女子(21~29才)10名に対し、25℃、70%RHと34℃、70%RHの人工気候室において、前額・上腹・前腕・手掌・大腿・下腿の前面に、濡れ条件の異なる接触子を置き、且つ滑らせた時の湿潤感・温冷感、及び測定部皮膚温と接触温、体重減少量、皮膚温分布を測定した。接触子は直径4cmで、温水を入れたプラスチックケース上に綿メリヤス(二重)をかぶせ、中央に温水を滴下した。水温は、測定部皮膚温-3℃、同温、+3℃の3条件、滴下水量は0.5, 1.0, 2.0 mlの3条件、荷重は40gと100gの2条件とした。 実験2, 触点密度: 湿潤条件と同一被験者、同一環境条件下で同一部位に対し、ナイロンテグスに一定荷重を負荷した接触子を用いて、1cm四方中の100点を刺激し、その接触感の有無を申告させた。

<結果> 皮膚の湿潤感受性は、高環境温下より低環境温下で、静止接触時より接触滑動時に、水温が皮膚温と同温より高温、さらに低温の時の方が、いずれも高く示された。滴下水量の差もある程度感受された。感受性の部位差を見ると、ほぼ全員で前額・手掌で高く上腹・下腿で低い結果となった。触点密度は被験者間で大きな差があるが、同一被験者同一部位の触点密度には再現性が認められた。触点密度の高いグループでは特に前額・手掌の密度が高く、湿潤感の部位差と同様の傾向を示した。